

米大統領選挙年のアノマリー

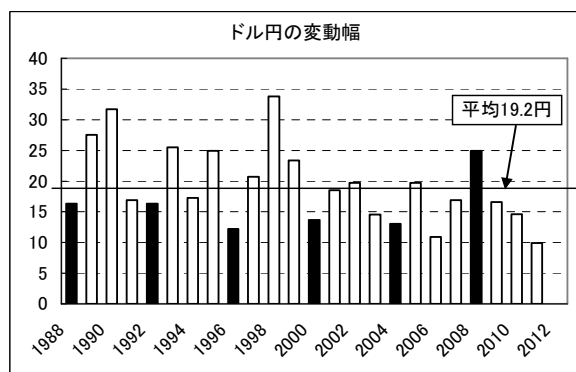
マーケット エディターズ・吉田 恒

今年は4年に一度の米大統領選挙が行われる年だ。為替のよく知られた「アノマリー」の一つに、米大統領選挙の年のドル円は小動き、ただ選挙終了の後からは大きく動き出すといったことがあるが、今年はどうだろうか。

米大統領選挙年のドル円は小動きで、選挙終了後から動き出すと、翌年、翌々年は大相場になりやすい。ところが、そんなアノマリーが、前回、2008年の米大統領選挙年では大きく崩れた形となった。リーマンショックに象徴される金融危機が広がる場所となった結果、ドル円も乱高下となり、値幅も20円を大きく超えた《資料参照》。

《資料》

変動幅	
1988	16.35
1989	27.55
1990	31.7
1991	16.92
1992	16.35
1993	25.55
1994	17.25
1995	24.95
1996	12.21
1997	20.69
1998	33.83
1999	23.4
2000	13.68
2001	18.51
2002	19.7
2003	14.55
2004	13.07
2005	19.73
2006	10.91
2007	16.92
2008	24.97
2009	16.6
2010	14.6
2011	9.9
2012	
平均	19.2
1988-2011	



出所: 日銀統計などよりMarket Editors作成

年間値幅		平均
88~07年平均		19.69円
選挙年	12.21~16.35円	14.33円
翌年	18.51~27.55円	22.41円
2年目	10.91~33.83円	22.68円
3年目	14.55~24.95円	19.35円
88-99年平均		22.2円
00-07年平均		15.88円

ただ、そんな2008年を除くと、1988年以降の米大統領選挙年のドル円値幅平均は14.3円で、1988年から2011年まで24年間のドル円の平均値幅19.2円を大きく下回っている。一方、1988年以降のドル円値幅トップ4は、1998年(33.8円)、1990年(31.7円)、1989年(27.5円)、1993年(25.5円)の順番。大統領選挙の翌年、翌々年に大相場が多いことがわかるだろう

こんなふうに、米大統領選挙の年に小動きとなり、選挙の翌年、そして翌々年の中間選

挙の年に大相場になる傾向があるのは、米政権の政策と関係しているとの考え方が基本だ。大統領選挙の年は新たな政策が打ち出しにくいため、相場も手掛かりがつかみにくい。そして、新たな政権スタートになると、政策的にも大胆に動きやすいため、それをきっかけに大相場になりやすいということだ。

さて、今年は7月が終わった段階で、ドル円は76-84円といった約8円の値幅にとどまっている。アノマリー通りに、大統領選挙が行われる11月までは値幅が10円を大きく超えない小動きが続くのだろうか。

ところで、ドル円の値幅も、大きな流れとしては縮小傾向が続いている。1988—1999年までのドル円値幅平均は22円だったが、リーマンショック以前、2000—2007年の平均は15円。

2000年を境に、それまでは一年間で20円以上の値幅になるのが普通だったドル円が、最近にかけては一年で15円程度の値幅になるのがせいぜいといった具合になっている。そんなドル円の値幅縮小傾向がまだ続くのかも注目されるところだ。(了)